

歴史学の“感じ方”

文学部日本史学専攻 准教授 うえの だいすけ 上野大輔

文学部に着任したのが2012年4月なので、今年度は10年目となる。振り返ればいろいろあったが、過ぎてみればあつという間である。やはり重要だと思われるのは、自分の研究にきちんと取り組めたか、そして学生たちの学びの手伝いできたか、ということである。

私の専門分野は日本近世史で、安土桃山時代から江戸時代までのおよそ300年間の対象となる。私は仏教の思想や教団組織に注目して、この時代の人々や社会の在り方を考えている。その際、重要な手がかりとなるのが、くずし字で書かれた古文書である。寺院を含むさまざまな場所に、大量に伝来している。これらを読み、先学の成果も参照しながら、自分なりの考察を試みる日々である。

こうした取り組みは、歴史学の一環ということになる。歴史とは、広い意味では過去の総体である。とはいえ、過去の総体をそのまま把握することはできないため、その中から特定の事象を取り上げて、過去の像を論理的に再構成する。このような過去の像を、よりよく獲得しようとするのが、歴史学の立場と言えよう。とはいえ、いざ実践するととなると、具体的事例に関する細かな論証に神経を労することとなり、広い視野を見失いがちである。

そうした折、席を外して思うことがある。歴史とは、私たちを取り巻く社会や私たちが自身に移り変わってゆくことである。そして二度と帰って来ることはない。今は亡きあの人もそうである。私たちの社会とは異なる社会や、異なる人々が、かつて存在した。それらは、今の私たちからの制約を受けない。なおかつ、それらは幾重にも積み重なり、その全ての帰結が、私たちとこの社会である。そして、私たちとこの社会も刻々と移り変わり、やがて忘れられてゆくだろう。

歴史学は、今はなき社会、そして数多くの死者たちとの邂逅でもある。こうしたことを感じ取り、また席に戻るようにしている。授業中には照れくさくて話せないことを、ここに書いてみた。



歴史の積み重なりを思わせる須佐ホルンフェルス (山口県萩市)



古文書も過去の人々や社会との出会いの場となる

談室

教員によるエッセイコーナー